

「初等家庭」における製作活動の教育的意義 - 学生自身による製作実習計画の立案と修正に着目して -

著者	橋 那由美
雑誌名	紀要
号	20(別冊)
ページ	250-260
発行年	2018-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000023

「初等家庭」における製作活動の教育的意義 - 学生自身による製作実習計画の立案と修正に着目して -

橘 那由美

キーワード：小学校家庭科、教科教育法、製作活動、実習計画

I. はじめに

「現在、小学校では、家庭科のみを教える専科の教師は少なく、専門知識も実践経験も少ない先生方が「家庭科」を教えなければならない状況」（流田 2012：2）にある。

その要因として、以下の三点を挙げる。第一に、児童数の減少に伴い、各学校単位が小規模化し、高学年においても専科制を採用することが困難になってきていることが指摘できよう。また、団塊世代の大量退職に伴う教員大量採用が行われた結果、20代30代の教員割合が急速に増加していることも要因として挙げられよう。

第二に、家庭科の中でも特に、衣生活領域においては、学習指導要領改訂のたびに被服製作領域が削減され、中学・高等学校では被服の製作が必修とされなくなり（扇澤ら 2009）、中・高家庭科の履修時間数の削減から、実習時間も制限されている（西田 2016）。さらには、小学校教員養成課程の必修科目において、「家庭科では、高校での学習内容に学校間のばらつきが大きく、また十分に習得できていない学生も多いため、小学校、中学校、高等学校の学習内容を概説」（大塚 2010：20）する必要性が高いという現状がある。しかしながら、平成32年度完全実施予定の新学習指導要領においても、「生活を豊かにするための布を用いた製作」が健在である。それ自体は意義深いことではあるが、大学等の小学校教員養成課程においても、小学校での家庭科の授業においても、多大な困難が推察されると言わざるを得ない。

第三には、前述 流田の指摘を引用するに「現代は～家庭生活から、さまざまな『ワザ』や『知恵』が奪われ～長年培われてきた生活のなかの英知や文化の伝承が減少し、家庭生活が無味乾燥なものになりつつ」（流田 2012：2）あるため、小学校教員も多分に漏れず、家庭生活全般においてのワザや知恵を習得できていないまま大人になっていると考えられる。

ただし、一口に「専門知識も実践経験も少ない」とは言うものの、その実状を示したデータはなかなか見当たらない。これに対して、あくまで筆者の私見ではあるが、教職課程の在学中の学生の習熟度実態を担当教員が論文等で明らかにすることは、その大学の名誉にかかわることになるため、極端に回避されていると推測せざるを得ない。実際に、筆者が散見したところ、下井倉ら（2014）くらいしか該当となる文献がないため、「教職課程履修中の学生が、あるいは経験の浅い教員が、どのような項目をどの程度しか習得できていない状態であるか」については極力触れられてこなかったと指摘せざるを得ない。

しかし、著書の中で勝田は、「Q&A で分かる!家庭科の授業づくりのアドバイス」と題した Q&A において、次のように記している。

「Q13 自分自身、調理や裁縫ができず、不安です」 「Answer 1日10分間、練習する」

「苦手なことは避けたいと思うのが人情です。しかし、漢字が書けないのにそれを教えることなどできないように、上手でないにしても一通りのやり方はできるようにしておく必要があります。（改行）それ

には、1日10分間の練習をお勧めします。特に裁縫は練習が命です。用具を机に常備しておき、児童用の運針練習用布を使って練習しましょう」

と回答している(勝田 2016:42)。この内容からは、初めて家庭科の授業を担当することになった教員が、「いかに指導するかといった授業方法以前の問題として、自らが小学校の授業内容をほとんど習得できていない現実」が推測できる。

上記のような実状のうち、特に教科「家庭」に特有の要因として、筆者の「初等教科教育法(家庭)」担当経験から次の3点を挙げる。

- 1) いわゆる受験科目のように受験に向けて一定レベルの内容習熟をめざす基準が存在せず、またその機会がない。高校や大学への進学に際し、家庭科の基本的な知識や技能が問われるケースは極めて稀である。そのため、小学校教員をめざして初等教育課程を履修中の学生であっても、そもそも小学生レベルの教科「家庭」の知識や技能を有していない可能性は否定できない。
- 2) 初等教育課程で開講される科目のうち、例えば音楽科のピアノにおいては、「初等音楽」「音楽科教育法」「初等教科教育法(音楽)」のように、ごく初心者であっても「バイエル何番」までは必ず習得すべきという基準が存在しており、またそれが可能となるような、「初歩の初歩」からの学修にも対応し得る科目設定や指導体制が整備されている。しかし、家庭科に関する教職科目では、特に「調理」や「布を用いた製作」の領域において、学生間の相当なスキル差がありながらも、習熟度に応じたカリキュラム編成が行われることはほとんどない。
- 3) 学習指導要領をはじめ、児童用教科書や指導書、一般書籍といった文献は存在する。しかし、家庭科の指導計画作成にあたっては、まず題材設定の段階で例えば、「布を用いた製作の『ランチョンマット』『クッションカバー』『エプロン』といった候補が複数存在する」、次に、内容の細部に渡っても、例えば「みそ汁の実を『じゃがいも』にするか『たまねぎに』にするかといった選択肢が数多く存在する」ため、指導にあたって、指導者自らが選択・決定しなければならない内容や事項が数多く存在する。

そこで本稿では、特に上記の3)に着目することとする。小学校教員養成課程 自由選択科目内での製作活動において、「題材設定」「実施計画作成」そしてその「計画の変更」までを全面的に学生に任せ、その製作活動および学修活動の分析を通して、学生がいかに上記3)の課題を克服していくかを明らかにし、製作活動の教育的意義の考察を試みることを目的とする。

II. 方法

1. 対象

2017年度後期「初等家庭」(1回生選択科目)受講生57名

※本学では、2017年度現在、「初等教科教育法(家庭)Ⅰ」(2回生必修科目)、「初等教科教育法(家庭)Ⅱ」(3回生必修科目)、というカリキュラム編成である。

2. 調査期間

2017年後期(9月～2018年1月)全15回

3. 方法

1) アンケート（記名自記式質問紙）実施

第1回目オリエンテーションの後、実施した。（2017年9月）（自由記述）

自己紹介ワークシート（A4片面1枚）の一角に、テーマ「初等家庭を選択した理由」「初等家庭で学びたいこと」の2項目を併記して1枠を設け、成績には一切反映させないことを説明の上、学生の自由な記述を奨励した。

2) 製作活動に関するワークシート2枚

①「作りたいもの構想シート」

第1回目に、本科目「初等家庭」製作学習の概要と説明し、ポケットティッシュケースやシャツをリメイクしたクッションカバー等の具体例を紹介した。そのうえで、「作りたいものを各自考えてくる」ことを次回までの課題とし、次週にワークシートへの記入をする旨を伝えた。そのうえで第2回目（2017年10月）に学生に記入させた。家庭科室内にある作品例や児童用教科書その他の参考文献を自由に閲覧し、学生同士で相談したり教員に質問したりする時間を多くとった。記入にあたっての第2回の授業90分すべてをこの作業にあてた。提出は原則として第2回の授業終了時としたが、そこで完全には締め切らず、第3回の授業以降にも直接声掛けをし、提出を促した。点検ののち返却したが、他の領域の指導内容と並行しつつ、修正指示し、再考再検討を促して、実施可能な計画となるよう繰り返し指導した。

②「製作計画および振り返りシート」

実際の製作実習には全5時を充てた。第4、5回目（2017年10月）および第11、12、13回目（2017年12月～2018年1月）にわたる製作活動全5回において、毎回学生に、始業時に計画を記入させ、終業時に振り返りを記入させた。最終回には、全体を通しての振り返りも記入させた。なお、製作の期間を5回連続で設定せず2期に分けたのは、計画内容の変更や追加に伴い、期間途中で材料の調達が必要になることを想定したからである。

なお、製作実習の題材設定にあたっては、学生に以下5点の内容を周知徹底した。

ア. 全5時のできるだけ早い時期に、ミシンかけの練習として古タオルをリユースした雑巾をひとり一枚製作し提出すること。

イ. 編み物は対象外とすること。

ウ. 材料は新しいものを調達するだけでなく、環境への影響を考える視点から、衣服のリユースなど中古の材料も選択肢に含められること。

エ. 総レースなど極端に高価な材料は使用しないこと。

オ. 第15回（最終回）において、受講メンバーの前で学生自身による作品紹介の機会を予定していること。

3) 実際の製作実習（90分×全5時）

実際の製作実習時間は全5時であったが、その前後も含めた流れを以下に記す。

第1回授業・・・科目の全体的なガイダンスおよび「作りたいもののワークシート」概要説明（約10分）

第2回授業・・・「作りたいもののワークシート」記入

第3回授業・・・(他領域の内容の通常授業。ただし「作りたいものワークシート」の提出は可能)

第4回授業・・・製作実習 第1時/全5時

第5回授業・・・製作実習 第2時/全5時

第6～10回授業・・・(他領域の内容の通常授業。ただし、学生からの製作実習に関する相談には随時応じた。製作途中のものについては原則として家庭科室で保管したが、自宅で製作の続きを希望する学生には持ち帰りを認めた)

第11回授業・・・製作実習 第3時/全5時

第12回授業・・・製作実習 第4時/全5時

第13回授業・・・製作実習 第5時/全5時

第14回授業・・・(他領域の内容の通常授業。この回を挟むことによって、製作実習時間内に仕上がらなかった場合にも、作品紹介までに完成させる猶予となることを想定した)

第15回授業・・・学生自身による作品紹介(実物を受講生全員に見せながら、1分程度のスピーチを行った)

なお、学生記入による前述1) 2) には記載されていない分も含む学生の言動をフィールドノーツに教員が記録した。

4) 倫理的配慮

対象学生には、本科目「初等家庭」を研究対象とする旨を、初回授業はじめ製作実習の回に担当教員から都度説明した。また、学生の意志や判断により研究対象から外れる権利があることを説明したうえで、研究対象となることに対する了承を得た。さらに、最終回において、学生の意志を再確認した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 受講理由についてのアンケート(記名自記式質問紙)

1) 結果

「初等家庭」を選択した理由については以下のような記述が得られた。回答に関してはまったくの自由記述であるため、項目ごとの人数の合計は受講数とは一致しない。また、一人の回答を複数項目に振り分けている場合もある。

ア. 家庭科の学習内容に対して好意的な記述・・・17名

「家庭科が好きだから」

「小中高と家庭科の授業が楽しかったから」

「少し前まで中学校の家庭科の先生になりたくて家庭科が好きなので選択した」

イ. 家庭科に対しての苦手意識を自認したうえで克服する意欲がみえる記述・・・7名

「家庭科全般が苦手だから」

「裁縫が苦手なのでそれを克服したい」

「とにかく得意ではないので」

ウ. 本科目が自由選択科目である点に着目した記述・・・8名

「苦手なので2回生になって必修の家庭科が始まってしまいうままでに、何とかしたいから思い切って履修した」

「家庭科が苦手だからわざわざ履修したくない気もあったが、それではダメだと思ったので」

「必修とはまた違う家庭科の楽しさを学びたい」

「2年次に必修があるのでその予習に」

「小学校教員になるために必要なことは何でもしたいと思ったから」

エ. 家庭科の指導方法に着目した記述・・・16名

「家庭科って、自分ではどうやって教えていいかわからなかったの、それを知りたいと思ったから」

「教師になれたとき、調理実習や裁縫などは経験を積まないとなかなかうまく出来ないと思ったから」

「家庭科の授業となると、座学というよりは実習的なことのほうが多いと思うが、その実習の授業の進め方を学びたいと思ったから」

「家庭科っておもしろいと思うことがあまりなかったので、楽しさを学んで授業できるようになりたいから」

オ. 自己の生活に役立つ内容を期待した記述・・・5名

「自分の生活のためになるから」

「料理がうまくなりたいから」

「一人暮らしの充実のために」

「社会人になったときや家庭をもったときに困らないようにするために」

カ. 具体的な内容に期待した記述・・・31名（うち調理実習27名）

「調理実習ができると思ったから」

「料理を学びたいから」

「いま服のリメイクにはまっていて、もっと上手になりたくて選択した」

キ. その他・・・3名

「先輩から楽しいと聞いたから」

「卒業単位には含まれるから」

「空きコマだったから」

2. 学生による製作実習計画の実際と補足説明

前述した2種類のワークシート②「作りたいもの構想シート」③「製作計画および振り返りシート」から、学生の製作実習計画を次のように分類した。

A・・・「作りたいもの構想シート」への記入が結果的にできなかった学生

B・・・「作りたいもの構想シート」に記入した題材とは異なる題材を製作した学生

C・・・「作りたいもの構想シート」に記入した題材を製作かつ完成させたうえで他の題材を仕上げた学生

- D…「作りたいもの構想シート」に記入した題材のうちの一部を製作し一部には取り組まなかった学生
 E…「作りたいもの構想シート」に記入したとおりの題材を製作し完成させた学生

以降は、各グループに属する学生の製作活動の一覧にするるとともに、授業担当教員である筆者による補足説明も交えて記述していく。

1) グループA

グループAは、全6名である。実際の製作物と、結果的に「作りたいもの構想シート」の提出がなされなかった要因は以下のとおりである。

表1 グループAの製作物と「作りたいもの構想シート」未提出理由

学生ID	実際の製作物	未提出理由
A-1	ミニ枕	初回時には単位登録を済ませておらずガイダンス欠席
A-2	巾着袋	本人が提出の必要性を感じず
A-3	ロール式パンケース	発想が突飛すぎる
A-4	パペット	発想が突飛すぎる
A-5	フェルト小物(焼きそば)	発想が突飛すぎる
A-6	多目的袋	小中高と製作実習の経験がほとんどない

2) グループB

グループBは、全19名である。変更理由は以下のとおりである。

表2 グループBの計画内容と実際の製作物

学生ID	始めに計画した題材	実際に製作した題材	変更理由
B-1	洋服リメイク	ジーンズをリメイクしたポケットのある名札	実際に作っていくうちに変化(具現化)していった。
B-2	シューズケース	巾着袋	見積り目の不備を教員が指摘する材料購入に反映されず用尺不足。
B-3	ランチョンマット	雪だるまのオーナメント	ミシンかけの経験がほとんどない。
B-4	お弁当袋	クリスマスオーナメント	季節が変わり、作りたいものが変わった。
B-5	枕カバー	座布団カバー(シャツリメイク)	手頃なシャツが自宅にあるのを思い出した。
B-6	枕	クッションカバー	布地を店頭で見て気が変わった
B-7	クッションカバー(児童用教科書に掲載されているシャツリメイク)	クッションカバー(伸縮性のあるTシャツと他の余り布を掛け合わせたリメイク)	どうしても捨てられないTシャツが見つかり、保存の意味を込めてリメイクしたくなった。
B-8	シューズ入れ	ジーンズのエプロン	作り始めて、欲しいものが変わった。
B-9	ティッシュケース	クッションカバー	学生B-7に影響されて、伸縮性のある素材のリメイクをしたくなった。
B-10	キーケース	巾着	製作過程で欲しいものが具体化した。
B-11	シューズ入れ	フェルトの名札(教育実習用)	よりニーズのあるアイテムを作りたい。
B-12	ポーチ	パスケース	布地や材料を店頭で見て気が変わった。
B-13	クッションカバー(シャツリメイク)	ティッシュケース2個	適当な古着が見つからなかった。
B-14	通帳ケース	部活用の足ふきマット3枚	欲しいものの具体的な完成図が具現化できなかった。
B-15	トートバック	フェルトの名札(教育実習用)	雑巾製作を経験しミシンの使用をためらった。

B-16	シューズケース	タグ付き巾着袋	気に入った着分の布地を店頭で見つけたが用尺が足りなかった。
B-17	巾着	ミニ枕	巾着のつもりで作っていくうちにサイズが小さくなったため結果的に変更。
B-18	フェルトの小物入れ	合格お守り	作りたいものを思い出した。
B-19	シューズ入れ	フェルトの名札	雑巾製作を経験しミシンの使用をためらった。

3) グループC

グループCは、全15名である。始めに計画した題材と追加製作した内容は以下のとおりである。

表3 グループCの実際の製作物

学生ID	始めに計画した題材 (=実際に製作)	追加製作した題材
C-1	ぬいぐるみ	フェルトスイーツ
C-2	クッションカバー (リメイク)	ティッシュケース2個
C-3	クッションカバー (リメイク)	ティッシュケース2個
C-4	スマホケース	クッションカバー (リメイク)
C-5	洋服リメイク (ポンチョ)	図画工作の授業で使用する立体的な布バナナ
C-6	クッションカバー (リメイク)	クラッチバック、ティッシュケース2個
C-7	小動物ペット移動用ポーチ	同一目的のものを夏用と冬用製作
C-8	フェルトスイーツ	リストバンド風ピンクッション
C-9	ヘアバンド、ジーンズのすそ加工	ティッシュケース、ピンクッション
C-10	ティッシュケース、お守り	フェルトの立体的なマスコット
C-11	バスマット (バスタオルで)	ペンケース、ティッシュケース
C-12	ティッシュケース	巾着袋 (祖母作成のトートバックをリメイク)
C-13	クッションカバー (リメイク)	フェルトスイーツ
C-14	クッションカバー (リメイク)	フェルトのカードケース
C-15	クッションカバー (リメイク)	クッションカバー (リメイク)

4) グループD

グループDは、1名のみである。始めに計画した題材と削減した題材およびその理由は以下のとおりである。

表4 グループDの計画内容と実際の製作物および削減理由

学生ID	始めに計画した題材	実際に製作した題材	削減理由
D-1	クッション、ジーンズに刺繍	クッションのみ	ジーンズは丈夫過ぎて、当初のイメージ通りの刺繍は困難であるとわかった。

5) グループE

グループEは、全16名である。実際の製作物は以下のとおりである。

表5 グループEの計画内容と実際の製作物

学生ID	始めに計画した題材 (=実際に製作) および作品の概要
E-1	トートバック (内ポケット付き)

E-2	刺繍をほどこしたブックカバー
E-3	クッションカバー（工程に、柄合わせ、取り出し口ミシンを含む）
E-4	羽織（高校教科書記載のはっぴの型紙を利用したもの。全ミシン縫い。手縫い作業なし）
E-5	羽織（高校教科書記載のはっぴの型紙を利用したもの。全ミシン縫い。手縫い作業なし）
E-6	きょうだいのためのお弁当袋（布地2種縫い合わせ、マチ付き、両ひも）
E-7	ファスナーポーチ（中布付きマチ付きで縫い代は隠す。ファスナーは曲線状に縫い付け）
E-8	学生証入れ（デニム生地を基調とし、周囲をバイアステープでくるむ）
E-9	フェルトの名札（教育実習用。名前を刺繍ではなくフェルトで切り抜き縫い付け）
E-10	ティッシュケース（取り出し口にバイアステープ）
E-11	ティッシュケース（取り出し口にバイアステープおよび刺繍）
E-12	トートバック（キルティング生地を基調とし、持ち手は平ひもを縫い付け）
E-13	トートバック（キルティング生地を基調とし、持ち手は平ひもを縫い付け）
E-14	抱き枕（サイズ 150 cm×40 cm程度）
E-15	スマホ用バッテリー入れ（巾着型マチ付き）
E-16	バッテリー入れ（巾着型マチ付き）

IV. 考察

まずグループAをみていく。A-1に対しては、担当教員が補足説明や個別対応を数回行ったが対応しきれなかった。学生の選択権の保証として履修登録修正期間を設けることも重要ではあるが、やはり初回のガイダンス受講は重要であるため、初回受講をしなかった影響は大きい。例えば「2回目の授業までに担当教員から別途概要説明を受けた上での履修登録のみ可とする」といったような措置を検討する必要性を感じる。しかし、他にも初回ガイダンスの時点で履修登録を済ませていなかった学生も1名おり、必ずしも初回未受講のみが要因ではないとも考えられる。

A-2は、かねがねバイト先で使いたい巾着袋のイメージが当時すでにあり、その製作以外に選択肢がなかったため、友人たちが自分の生活を振り返って作りたいものを列挙したり、複数の候補のうちで迷ったりする段階が全く不要であったから記入も提出もしなかったとの本人談であった。

A-3～5に関しては、いずれも極端に発想が個性的な学生であり、感性が豊か過ぎるゆえに、担当教員の用意した参考資料の中には自分の思いと合致した題材を見つけられず、なかなかイメージを具現化および記入できなかったものと考えられる。また、実際に材料を準備して製作を開始した後も大小の変更が多く、担当教員からの「細部に時間をかけ過ぎではないか」といった類の助言も受け入れにくく、大半を全5時修了後に自宅で仕上げるといった行動が目立った。

A-6に関しては、家庭科に対する苦手意識が強く、小中高でも自身の手で作品を仕上げた経験がなく、「今まで教師や友人、家族の手で仕上げてもらった記憶しかない」と語る学生であり、本科目の履修において苦手意識の払拭を図ることができなかったと推測できる。

結果として、「作りたいもの構想シート」の内容云々ではなく提出そのものがなされなかった学生に対しては、理由や事情は様々であれ相当な困難を抱えていることをもっと認識すべきであった。

次にグループBをみていく。このグループに属するのは、比較的具体的な構想を練って記述し提出したにもかかわらず、材料購入の段階で翻意したり、材料を調達してきたが用尺に満たなかったり、構想

を練った後で実生活上の必要アイテムを思い出したりして、結果的に異なる題材に取り組んだ学生たちである。変更理由はいずれも素朴なものが多く、全員が変更時期は材料調達などの行動以後に翻意していることから、製作活動の経験値の少なさがうかがえるグループと言えよう。このグループの製作スキルは、ミシンの下糸の準備がこなせる者から、逆に、2個のボタン付けに90分を費やしてしまう者まで製作活動スキルの差が大きすぎた。このスキル格差は、必修科目となるとさらに大きくなることが予測されるため、選択科目以上に手立てを検討する必要があると考えられる。

続いてCグループである。題材を追加できる時間的余裕が生じた理由として「当初の予想ほど第一作品に時間がかからなかったため」に全員が該当する。加えて、総じてコミュニケーションが良好で社交的な学生が多く、苦手意識のあるミシンの糸掛けを友人に依頼したり、友人の取り組んだ題材に興味を示して作り方を教わったりといった行動がスムーズに行えたことも大きい。また、小学生の頃には全くできなかったと自認しているミシンの操作全般が、以後全く使用していないにもかかわらず容易にできたことに自身で驚く学生も複数名おり、比較的要領のよい学生がこのグループに属しているとも分析できよう。

1名のみであったが、初めの計画内容を削減した学生をグループDとした。「ジーンズをミシンで縫い合わせることは可能であるが、手刺繍は現実的ではない」という担当教員の助言を作業前には聞き入れられず、実際に自分のジーパンを持参し作業を開始してはじめて、状況を理解した。

最後のグループEは、何の変更もなく当初の計画を遂行できた学生たちである。表5のとおり、材料調達前から詳細に計画が練られており、時間配分も妥当であった。もちろんミシンの操作は総じて十分に慣れており、下糸の準備や曲がった針の交換などもスムーズにこなす学生が多かった。他グループと比較して、製作活動の経験値が圧倒的であることは、明白である。しかし、このグループに問題が無いかといえば、決してそのようなことはない。2年次3年次に開講される「初等教科教育法(家庭)ⅠおよびⅡ」を本学では全員必修としてしている。筆者もこれらの必修科目を担当してきたが、その中での製作活動といえば、エプロンやランチョンマットといった、ごく初歩的な題材にとどまっていた。よしんば「初等教科教育法(家庭)Ⅱ」は指導案の作成や模擬授業とその振り返りといった指導法に重きを置いた科目であるため、製作活動スキルのある学生にとっても新たに家庭科の指導法を学ぶ機会となる側面もある。ただし、教科の内容学を中心とした「初等教科教育法(家庭)Ⅰ」においては、グループEに属する学生の多くは、少なくとも「布を用いた製作」の領域には新たに学修することがほとんどないと推察される。問題はこれに限らない。家庭科における製作活動の多くは、まったくの個人での活動という展開例は少なく、大半は何名かのグループで同じ作業台を囲み、ミシンやアイロンを共有するのが一般的である。その状況で、グループEの学生たちがミシンのセッティングを済ませ、ミシントラブルに手際よく対処してしまうことは、それ以外の、主としてあまり製作活動スキルに乏しい学生たちが、自己の足りないスキルを身に着ける機会を奪っているのが現状ではないだろうか。

実際の製作活動 全5時の記録となった「製作計画および振り返りシート」上の各時の記録については、グループAの学生は特に記載が不十分であった。グループBやCの学生は変更・追加の経過が詳細に端的に記されている学生とまったく記述がない学生とがあった。また、グループCの学生においては、各時の予定内容と実際に行った内容との間に毎回のように齟齬が生じている学生も多かった。1回生とはいえ自己の作業所要時間を見積もることの難しい学生が、今後進級につれて学習指導案を作成し、模擬授業や教育実習をこなすためには、さらなる製作実習経験を積み、製作活動スキルを向上させる必要性を指摘できよう。

また、同じく「製作計画および振り返りシート」上の「全体を通しての振り返り」と題した自由記述欄には、大半の学生からの肯定的かつ建設的な記述が得られた。「予定をしっかりと立てるのと大きさを決めて測るのを先にきちんとした方が、結果的にはラクに作れたかなと思った」「ちょっとしたことを工夫する必要性を学べた」「裁縫は苦手でミシンの使い方さえあやしかつたが、この家庭科（初等家庭）を通して裁縫スキルの向上を実感した」といった記述が多かった。特に裁縫スキル、製作活動スキルの実感を記述したのは、特に男子学生や、「初等家庭」選択理由を「家庭科が苦手」「必修に備えて」と回答した学生に多く、学生の一定のニーズに応えられたとも考察できよう。

とはいえ、本稿の実践は選択科目とはいえども、あまりにも学生の自由度が高すぎる内容であったのは、授業担当者自ら認識しており、汗顔の至りでもある。しかし、筆者の経験上、初等教育課程の学生に、これほどの自由度を以て「題材設定」「実施計画作成」そしてその「計画の変更」までを全面的に任せしたのは初めての試みであった。ある程度の推測はしていたが、「エプロンにつけるポケットの形」程度の自由度設定では決して気づき得なかった学生の実情を直視し、授業担当者としての反省点や改善の方向性を模索する好機となった。

V. おわりに

冒頭に挙げた、初等教育課程の学生や若手教員がその教科を指導するにあたっての難しさの要因のうち、教科「家庭」に特有と考えられる問題は、3) 指導者自らが選択・決定しなければならない内容や事項が数多く存在することのみに起因するのではなく、1) 2) を理由として「製作活動スキル」が不十分であることが、結果として3) の選択・決定の困難さにつながっている可能性が示唆された。

これを踏まえて、今後よりよい教職科目の在り方を模索していきたい。

大和大学教育学部・非常勤講師

【引用文献・参考文献】

- ・扇澤美千子・川端 博子, 2009, 「被服製作学習への意識と自己効力感の関連大学生の調査による考察」茨城キリスト教大学紀要第43号人文科学. 37~48
- ・大塚真理子, 2010, 「小学校教員養成科目 家庭科における授業改善の一考察—板書とパワーポイントによる授業形態の比較を通して—」佛教大学教育学部論集 第21号, 19-30
- ・勝田映子, 2016, 『スペシャリスト直伝! 小学校家庭科授業成功の極意』, 明治図書
- ・櫻井純子、内野紀子、鳴海多恵子監修, 2009, 『新学習指導要領を読み解く よくわかる小学校家庭科学習指導要領 ビジュアル解説 授業への生かし方』, 開隆堂出版
- ・下井倉ともみ・土井一仁・松本伸示, 2014, 「理科を専攻としない学生を対象とした『小学校理科を教える自信』に関する調査—理科内容学の視点から—」科学教育研究 Vol. 38No.4, 238-247
- ・筒井 恭子, 2012, 『小学校家庭科の授業づくりと評価』, 明治図書
- ・流田直 監修、田中京子・亀井佑子・勝田映子 執筆, 2012, 『家庭科の基本—できますか? 教えられますか? いまさら聞けない…生活のワザ、満載!』, 学研教育みらい
- ・西田順子, 2016, 「家庭科教育法における製作活動の教育的意義」樟蔭教職研究 1, 79-86
- ・文部科学省検定済教科書 小学校家庭科用『新しい家庭 5・6』[平成23-26年度用]東京書籍
- ・文部科学省検定済教科書 小学校家庭科用『小学校わたしたちの家庭科 5・6』[平成27年度版]開隆

堂

・文部科学省検定済教科書 高等学校家庭科用『新家庭総合 ともに生きる 暮らしをつくる』[平成24年度版]教育図書